



著 北原みのる  
画 ピロ水  
原作 アトリエかぐや

姉はカバジヨ  
専属メイド



ぶらばら文庫



本日は家政婦でせう、  
お手をどうぞ、メイドでせう……  
ごなすゆづりのかも知れない。

一番大事なのは、  
ひろ君とずっと一緒に  
いられることだから――

エピソード1	プロローグ……………	005
エピソード2	お姉ちゃんは専属メイド!?…	016
エピソード3	ずっと好きだったから……………	042
エピソード4	新しい朝……………	106
エピソード5	俺だけのメイドさん……………	141
エピソード6	おっばいはお好き?……………	187
エピソード7	メイド三昧……………	214
エピソード8	姉が妻になる日……………	246

昨日じっくり見たのに、やっぱりまだドキドキする。  
 というか、慣れることがあるんだろうか……。

「さゆ姉……今、準備するから……」

俺はソコから視線を逸らすことなく、ごそごと肉棒を取り出した。  
 先っぽから我慢汁が溢れ、さゆ姉のお腹につうう——と垂れ落ちる。

「ふはぁ……もう、ピンピンだね♪」

「……嬉しそうだな」

「おっぱい触られてる時もあったけど……やっぱりひろ君を見ると、これからするんだ  
 なあってすごく感じるから……」

——びくんッ。

「あ、あれっ……!? また、大きくなった……?」

「さゆ姉がエッチなことを言うから……反応した」

「……え? あ、あぁ……あう……確かに、ちよつとエッチだったかも……」

「ん……すげー興奮した」

囁くように言って、顔を近づける。

そのまま、肉棒を掴み先端を割れ目に押し当てた。  
 にゆるにゆると、優しくこすりつける。

そして膣穴に先端をあてがおうとした時、ふとさゆ姉が声を上げた。

「あ、待って……この前言ってたやつ、ちゃんとさっき買ってきたの……」

メイド服のポケットから、小さな包みを取り出す。それは、胃薬の包みのような真四角  
 の、その存在だけはよく知っているもので。

「それって……コンドームだよね」

「ん……か、買うの恥ずかしかったんだからね。でも、大事なことだし、前に用意するつ  
 て約束したし……」

誤魔化すように微笑むさゆ姉。

買った時のことを思い出したのだろう、顔が真っ赤だ。

「……そうだよな、大事なことだもんな」

危ないところだった。

勢いに任せて、「生」でしてしまふところだった。

「俺、ついひとりで盛り上がって——ごめん」

「ふふっ。ひろ君、時々抜けてる時があるからね、私がいないとダメなんだから……ふふ  
 っ♪」

得意満面な顔に、俺は何も言い返せなかった。

料理が上手にできなかった分、俺のフォローができたことに満足してるのだろう。

「……さゆ姉、えらい」

「えへ……我慢できないよね？　すぐに私がつけてあげるね……」

そう言つてさゆ姉は身体を起こすと、俺を座らせた。

「それじゃ早速着けて……」

と、そこでさゆ姉の言葉と動きが止まる。

「??? ……どうしたの？」

「こ、これって……このまま着けていいのかな？」

「いいと思うけど……」

「でも、ひろ君のちゃんと大きくなってない感じがするから……着けてから大きくなつたら痛いんじゃないのかな？」

「……結構、大きくなつてると思うんだけど」

「そうかなあ……と、さゆ姉は首を捻りながら俺の肉棒に手をかけた。

「ん……やっぱり、ちよつと小さいかも。私の中に入つてた時は、もつと大きかった気がする」

それは膣内だからそう感じるだけなんじゃ？　とも思うが、自分でも完全に勃起してる状態というのがよく分からない。

「んふふ、それじゃあまず……こつちをおおきくしてあげるね……んしょ……」

くちゅくちゅ……。

既に我慢汁とさゆ姉の愛液で汚れていた肉棒が、ゆつくりと上下にしごかれていく。カリの部分が当たつて、すぐ気持ちいい。

「……ん、つと、ちよつとゴムが邪魔かな。ええと……あむ」

言つて、さゆ姉はゴムの包みを唇に咥えた。

無意識なんだろうけど、すっげーエッチだった。

「んふ……おーひふなつた」

そりゃ……なるに決まつてる。

自分でも驚いたが、肉棒がより一層大きく硬くなったのを感じる。

「んふ……んふ、はふう……」

グチュグチュと肉棒をしごきながら、さゆ姉がこちらを窺うように見つめてくる。「もう着ける？　それとも、このまま続ける？」と、視線で訊ねてくるものだった。

「このままも気持ちいいけど……俺、早くさゆ姉とひとつになりたい」

「んう」

嬉しそうに喉を鳴らし、さゆ姉は片手でゴムの包みを掴み、そのまま口で破いた。ゴムを取り出して――。

「ええと、こつちが表だから……この出っぱりをつまんでひろ君のに被せるんだよね

……

「……多分。授業でそんなこと言ってた気がする」

「わ、私も……授業で聞いただけだから、間違ってたらゴメンね？」

「ん……だ、大丈夫だと思う。そのまま着けて？」

「うん……痛かったら言ってみてね？」

さゆ姉が恐る恐る、ゴムのリング状になった部分を亀頭に被せてくる。

そのまま、ゆっくりと下にくるくると回しながら装着していく。

「あう、これ……内側にゼリーみたいなのがついてて、着けやすくなってるみたい……」

「そ、そうなんだ……」

正直、ドロドロで分らない。

「ん、んしょ——あれ、なかなかつかない——」

にぎにぎ……。

「ちょ、さゆ姉——っ」

手こずるさゆ姉に先っぽを何度も弄られ、思わずピクンと肉棒が反応してしまう。

そのせいで、半分まで着けていたコンドームが外れてしまった。

「も、もう、暴れちゃダメ。ゴムが着けられないよ」

「そう言われても……」

コレばかりは、俺にはどうしようもない。

さゆ姉も「それもそうか」と気づいたのか、肉棒を掴み再び装着を試みる。

「う、動いちゃダメだからね……ん、んふう……」

——むぎゆ。

「うあ——っ!？」

刺激に思わず腰が動いてしまった。

今度はゴムは外れなかったが、さゆ姉の手が離れてしまう。

「んもおーッ、ダメだつて言ってるでしょーッ」

とか言いつつ、さゆ姉はどこか楽しそうだった。

「次は大丈夫」

「んー、ホントかなあッ」

苦笑しながら、さゆ姉がコンドームを下ろしてゆく。

今度は大きく反応することなく、根本まで薄いゴムの色に包まれた。

「んふ、そーちやくかんりよーッ、全く、ひろ君のは暴れん坊さんだねえ」

「うるせえ……さゆ姉の手つきがエロいからだろ」

「というか、ひろ君が敏感過ぎなんじゃない？」

「……その点に関しては、さゆ姉も一緒だろ」

お互いに軽口をたたきあう。

いつも通りのやりとりに、なんだか不思議な感覚が広がる。

「……どう？ 初めてつけた感想は」

「不思議だな……窮屈な感じもするけど、意外に違和感ないかも」

「ふふ……そーなんだ。私も……違う風を感じるのかな？」

ゴムがしっかりと着いているか確認しながら、さゆ姉が照れくさそうに微笑む。

うう、こうして触られるだけで気持ちいい……。

「これで、準備完了……だよね？」

「ああ……うん」

これから、セックスするんだよな。

そう、いよいよ——ひとつになるんだ。

もうそれだけで、頭が沸騰しそうなほど興奮してしまう。

「ひろ君……ガッチガチになってる♪　すごく窮屈そう……大丈夫？」

「ん……さゆ姉こそ大丈夫？」

「いよいよ……はやく、しよ♪」

頷き合ってから、俺はさゆ姉を再びソファに押し倒した。

「——はふう」



ぶちばら文庫

# 姉はカノジョで専属メイド

2011年 12月28日 初版第1刷発行

■著 者 北原みのる  
■イラスト ピロ水  
■原 作 アトリエかぐや

発行人：久保田裕  
発行元：株式会社パラダイム  
〒166-0011  
東京都杉並区梅里2-40-19  
ワールドビル202  
TEL 03-5306-6921

印刷所：中央精版印刷株式会社

本書の内容を無断で複製・複写・放送・データ配信などを行うことは、  
かたくお断りいたします。

落丁・乱丁はお取り替えいたします。

定価はカバーに表示してあります。

©MINORU KITAHARA ©2011 KaGuYa

Printed in Japan 2011

PP032

ぶちばら文庫  
creative

# それでも 水着は 脱がさない!

Soredemo  
Mizugi  
Ha  
Nugasanai!

好評発売中

偶然当たった沖縄旅行。憧れの水無瀬まどかにつきあい始め、幸せ絶頂だった康祐は、迷わず決意を固めた。この旅行中に、まどかと初エッチをするのだ。だが、行きの際内で出会った陽子に初体験を手伝ってもらったことで、ふたりの旅行は誘惑の連続になってしまった。意外と巨乳だったまどかの水着姿に感動しつつ、大人な陽子にも惹かれる康祐は、水着エッチの毎日!

ぶちばら文庫23  
玉城琴也 著  
珈琲貴族 画  
定価 670円(税別)真夏の天使たちよ...  
脱いじやダメ!  
絶対!

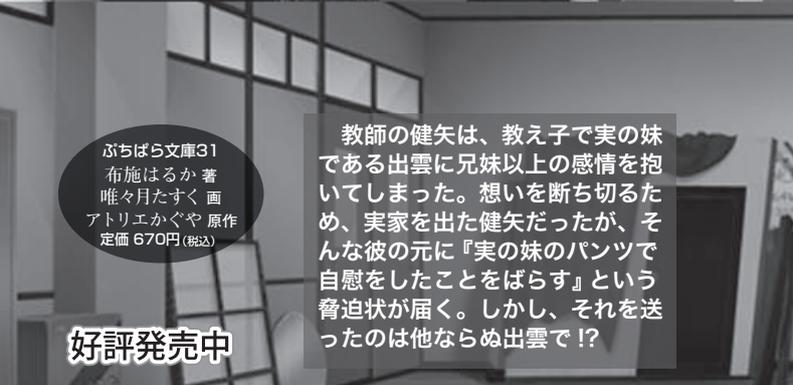


# 妹ハジメテ

♥ 親にはナイショの子作り性生活 ♥

—甘原出雲編—

兄さん……実の妹のハジメテ、  
ずっと欲しかったんでしょ？



ぶちばら文庫31  
布施はるか 著  
唯々月たすく 画  
アトリエかぐや 原作  
定価 670円(税別)

教師の健矢は、教え子で実の妹である出雲に兄妹以上の感情を抱いてしまった。想いを断ち切るため、実家を出た健矢だったが、そんな彼の元に『実の妹のパンツで自慰をしたことをばらす』という脅迫状が届く。しかし、それを送ったのは他ならぬ出雲で!?

好評発売中





ぶちばら文庫33  
 夜空野ねこ 著  
 ぼたん味噌 画  
 アトリエかぐや 原作  
 定価 670円(税込)

才斗のクラスに女の子が転校してきた。その女の子——ユリーシャは、美しい顔立ちと穏やかな性格から、瞬く間に学園の人気者に。しかし、ある日、才斗は彼女が狼女であるという秘密を知ってしまう。しかも、彼女は発情期のまっただ中で!?



好評発売中

気になるあのコはオオカミ娘っ!?

発情  
 し〜ずん



# パラダイム **ぷちぱら文庫** は ライター&イラストレーターを募集中です!

「ぷちぱら文庫」シリーズを盛り上げる、新たな作家を募集いたします。「ぷちぱら文庫」は、ゲームノベライズだけでなく、オリジナル創作による美少女小説も刊行予定です。

応募規定は、それぞれ以下ようになります。

皆様のご応募をお待ちしております!

## 1. 募集内容

「ぷちぱら文庫」シリーズでは、美少女ゲームやライトノベルを好む読者層へ向けた作品作りを目指しています。ご応募いただく場合も、ヒロインの個性や魅力が伝わるようなもの、シチュエーションへのこだわりが感じられるものなど、はっきりしたテーマのある作品でお願いいたします。題材はとくに限定していません。発表済か、未発表作品かも問いません。

## 2. 送付方法

小説の場合は、テキストデータをメールでご応募ください。コミックやイラストは、原稿用紙をお送りいただいても、データをお送りいただいても結構です。データが5MB以上の場合は、ファイル転送サービスなどをご利用ください。コミックには枚数の規定はありません。小説は1ページを17行×40文字として、50ページ以上の作品をお送りください。

## 3. 選考結果などについて

メールでご応募いただいた場合は、着信のご連絡は必ず行っています。選考は随時行っており、締め切りはとくにございません。選考終了後、採用の方にのみ別途お返事をしております。通常はお返事までに、2週間~1か月ほどお時間がかかります。

## 4. 作品の送付先

ご郵送の場合は下記住所までお送りください。メールでのご応募は以下のアドレスで受け付けております。どちらの場合も必ず「お名前、年齢、ご職業、ご住所、電話番号」を書いた紙を同封するか、明記してください。

メールの宛先: [desk@parabook.co.jp](mailto:desk@parabook.co.jp)

〒166-0011 東京都杉並区梅里2-40-19 ワールドビル202  
株式会社パラダイム 「ぷちぱら文庫作品応募」係

※ご応募の際の個人情報は、選考結果のご連絡にのみ使用いたします。

作品のご返却を希望の場合は、宛名を書いた返信用封筒と切手を同封してください。